

ハプスブルク帝国下ボスニアにおけるイスラーム統治とその反応

——レイス・ウル・ウレマー職をめぐる——

米 岡 大 輔

はじめに

本稿の目的は、一八七八年七月のベルリン条約締結後、ハプスブルク帝国の統治下におかれたバルカン半島北西部のボスニア・ヘルツェゴヴィナ（以下、ボスニア）において、帝国が展開したイスラーム統治の在り方とそれに対するイスラーム教徒の反応を考察することにある。ボスニアは四〇〇年以上にわたりオスマン帝国領に帰属した結果、正教徒、イスラーム教徒、カトリックが混住する地域となっていた。ハプスブルク帝国がボスニアを占領した段階においては、正教徒とカトリックはそれぞれセルビア人あるいはクロアチア人としての民族主義的な活動に傾斜し、セルビア王国やハプスブルク領内のクロアチア地域へのボスニアの統合をすでに模索し始めていた。南スラヴ系の諸民族を抱えるハプ

スブルク国家にとって、この両民族の動向は国内の民族間の均衡をも揺るがす問題とされた。そこでハプスブルク帝国は、ボスニアにおいて多岐にわたる統治政策の実践によりその民族主義的な活動の抑制を試みたが、現実にはその拡大を抑えることは容易ではなかった^①。こうした状況のなかでハプスブルク帝国がボスニアを領有していくためには、当地のイスラーム共同体を帝国統治の支えとすることが極めて重要な課題となっていた^②。

このボスニアにおける帝国のイスラーム統治の諸相と、それに対するイスラーム教徒側の諸動向をこれまで論じてきた一連の先行研究の問題点は以下の二点に集約される。

第一に、カピジッチやクラリヤチッチの研究において看取されるように、ハプスブルク帝国によるボスニアでのイスラーム統治の根本的な目的が解明されていない点である。彼らは、帝国がレ

イス・ウル・ウレマー (Reisul-Ulema「ウレマーの長」、ウレマーはイスラーム諸学を修めた人々のこと) と呼ばれる宗教職の設置により、ボスニアのイスラーム共同体の支配を確固なものとしようとしたことを明らかにした。^③だがそこでは、帝国側がこのような宗教職を創設した経緯やその意図に関しては十分に検証されることはなかった。近年のドウルミシェヴィチの研究も、当時の宗教制度の在り方を考察対象としたが、これらの先行研究の問題点を克服しているとは言えない。^④

第二に、帝国の宗教政策に対するイスラーム教徒側の反応が、バルカン近代史研究に通底した民族解放史的な歴史観の文脈に沿って叙述されてきた点である。たとえばシェヒツチャドーニアの研究は、イスラーム教徒が帝国支配に抗し、自治的な宗教制度を求めていく活動の様相を解明した。ただし彼らの研究では、この活動の過程で育まれたイスラーム教徒の自意識が総じて、民族的な帰属意識の萌芽に帰結するものとして位置づけられた。その結果、イスラーム教徒がこの活動を展開するに至った背景やその活動理念が正確に捉えられることはなかった。^⑤

こうした研究状況において、ハプスブルク帝国とボスニアのイスラーム教徒の関係は、帝国とボスニアの他民族との関係に沿うように、帝国対民族という図式で論じられていくこととなった。

たとえばハプスブルク史家オーキーは、帝国治下のボスニアの諸民族の動向を総合的に考察するなかで、帝国統治とイスラーム教徒の反応についても相互に分析した。^⑥しかし彼は、サラエヴォ事件までの展開を見据え、帝国の諸政策に対する民族主義的な活動を論ずることに主眼をおいた結果、帝国とイスラーム教徒の関係についても帝国対民族という図式を示すにとどまっており、従来の研究を修正しているとは言いがたい。

以上の先行研究の問題点を見直すうえで重要なことは、ハプスブルク帝国によるボスニア統治とイスラーム教徒の関係を考察する際も、同時代のオスマン帝国の状況も視野に入れることである。トドロヴァも指摘したとおり、バルカン各地の歴史学研究は民族解放史的な歴史観を追求するほどに、オスマン帝国が当地に及ぼし続けた政治的影響力を全く看過したのであった。^⑦しかし、ハプスブルク帝国とバルカン地域の歴史的關係を考慮すれば、オスマン帝国の存在はむしろ常に無視しえまい。それゆえ、ハプスブルク帝国統治とボスニアのイスラーム教徒の関係をより正確に描写するためには、当時のオスマン帝国の状況も念頭においてのオスマン帝国の国家体制は、本稿でも示されるとおり、その両者の関係に大きく作用するものであった。

一九世紀後半以降のオスマン帝国は、西洋諸国の進出と民族国家の独立が進行する過程において未曾有の危機に直面した。そこで一八七六年から一九〇九年までスルタンに在位したアブデュルハミト二世は、国内全住民の平等を唱えたいわゆる「ミドハト憲法」とそれにもとづき設置された帝国議会双方を停止し、専制政治を押し進めるなか、「イスラーム主義」を国家の統合理念として定めた。それは、オスマン帝国が全イスラームの拠り所となる国家であることを強調し、西洋諸国の勢力拡大に対抗して帝国の一体性を保持しようとするもので、世界各地のイスラーム教徒、とりわけ西洋諸国の支配下におかれたイスラーム教徒の諸活動に多大なる影響を及ぼした^⑧。

それではハプスブルク帝国は、こうしたオスマン国家の在り方に対峙しつつ、ボスニアにおいていかなるイスラーム統治を実践しようとしたのか。これに対してイスラーム教徒側はオスマン国家との関係も踏まえて、いかなる反応を示したのか。これらの問題を再考すべく、本稿では、ハプスブルク帝国のボスニア全統治期間のうち、とくに帝国がボスニアを正式に併合する一九〇八年までの時期に限定して議論を進めていく。具体的には、帝国の統治体制の一部としてレイス・ウル・ウレマー職が創設される過程と、その宗教職設置へのイスラーム教徒側の反応について考察す

る。ここから、オスマン帝国の動向も視野に入れることにより、従来語られてきたハプスブルク帝国によるボスニア統治を、近代の西洋諸国がオスマン領域を自らの支配体系のなかに包摂していく過程と共時的な局面として俯瞰的に見直す足がかりとしたい。

本稿の主たる史料は、オーストリア王室・宮廷および国立文書館に所蔵されたボスニア統治に関する未刊行史料とボスニアで出版された刊行史料である。現時点では筆者の能力上、オスマン帝国側の史料を分析することはむずかしい。それゆえオスマン帝国側の対応については今後、その史料状況も十分に調査したうえで、さらなる検討をすすめる必要がある。それでも、先に紹介した史料を部分的にしか用いていない先行研究の現状を念頭におけば、本稿は、ハプスブルク帝国がオスマン帝国の情勢も視野に入れ、ボスニアにおけるイスラーム統治をいかにして実践し、さらにそれがどのような反応を引き起こしたのか、という問題を解明することに寄与するものと思われる。

以下第一章で、ハプスブルク帝国がオスマン帝国との外交交渉をへてボスニアを領有するに至る状況について考察する。第二章では、占領後のボスニアにおいてハプスブルク帝国がレイス・ウル・ウレマー職を創設する経緯と目的について検討する。以上の議論から、ハプスブルク帝国が当時のオスマン国家の政情を意識

して実践したボスニア統治の在り方を浮き彫りにしたい。そのうえで最後に第三章では、帝国のこの宗教政策に対して展開されたイスラーム教徒側の活動に着目し、当時のオスマン国家と彼らの宗教的な帰属意識との関係性についてみていく。

- ① 帝国によるボスニアのセルビア系住民に対する統治政策の一端については、拙稿「ハプスブルク帝国統治下ボスニア・ヘルツェゴヴィナにおける初等教育政策の展開」『東欧史研究』二八号、二〇〇六年、二四―四四頁。
- ② 一八七九年時点のボスニア全人口（約一六〇万人）に占めるイスラーム教徒の割合は三八・八%であった。Donia, R. J., and Fine, J. V., *Bosnia and Herzegovina: A Tradition Betrayed*, New York, 1994, p. 86-87より算出。
- ③ Kapiđić, H. *Hercegovacki ustanak 1882. godine*, Sarajevo, 1973, str. 66-72; Kraljčić, T. *Kalajev režim u Bosni i Hercegovini 1882-1903*, Sarajevo, 1987, str. 351-366.
- ④ Đurmišević, E., *Uspostlane i pravni položaj Rijnske Islamske zajednice u Bosni i Hercegovini 1882-1899*, Sarajevo, 2002.
- ⑤ Šehić, N. *Autonomni pokret muslimana za vjertne austrovarske uprave u Bosni i Hercegovini*, Sarajevo, 1980; Donia, R. J. *Islam under the Double Eagle: the Muslims of Bosnia and Herzegovina, 1878-1914*, New York, 1981 (以下、Donia, Islam).
- ⑥ Okey, R., *Taming Balkan Nationalism: The Habsburg "Civilizing Mission" in Bosnia, 1878-1914*, New York, 2007.
- ⑦ Todorova, M., "The Ottoman Legacy in the Balkan", Brown, L. C. (ed.), *Imperial Legacy: The Ottoman Imprint on the Balkans and the*

Middle East, New York, 1996, pp. 45-77.

- ⑧ 当時のオスマン帝国情勢については、Karpas, K. H., *The Politicization of Islam: Reconstructing Identity, State, Faith, and Community in the Late Ottoman State*, New York, 2000.

一 ボスニア領有をめぐる摩擦

本章では、次章以降の議論の前提として、ボスニア領有に関する一八七九年四月の協定（以下、四月協定）締結までの、ハプスブルクとオスマン両国家間における交渉の過程を考察しよう。

オスマン帝国にとって一八七八年七月のベルリン条約締結は、帝国領土のさらなる縮小を意味していた。そのため、「イスラーム主義」という理念を掲げたアブデュルハミト二世は、「イスラーム教徒が住民の約四割を占めるボスニアの割譲についても「いかなる保障もなく」認めるわけにはいかなかった。

従来から指摘されてきたとおり、アブデュルハミト二世によるこの「イスラーム主義」の起源は一八世紀にさかのぼる。一七七四年にロシアとのあいだで締結されたキエフ・カイナルジャ条約において、オスマン帝国のスルタンは政治的支配権を失ったクリミアのイスラーム教徒に対して、カリフとしての宗教的権威の保持を主張した。こうした背景には、スルタンが西洋諸国の支

配下におかれるイスラーム教徒の「守護者」として振る舞うことで、西洋の国際政治体系に包摂されていくオスマン国家の国際的地位を保持しようする意図があった。^②

オスマン帝国はハプスブルク帝国によるボスニア占領に際しても、そこに住むイスラーム教徒へのスルタンの権限が継続して及ぶ必要があることを唱えた。一八七八年七月一日から二〇日にかけて、ハプスブルク帝国の在オスマン帝国大使ツイヒーはオスマン政府から、両国家による公式な協定の締結により、ボスニアにおいてスルタンの統治権が有効であり続けることを承認するよう求められた。オスマン政府は、この協定の締結が、ボスニア占領時に現地住民の反発を回避できるという点でハプスブルク側にとっても有益なものとなると考えていた。^③

この要求に対してハプスブルク帝国は当初、ボスニア占領がベリン会議の決定に従った正当な行動となるゆえ、個別の協定締結は不要であると主張した。^④ただし、占領後のボスニアにおけるスルタンの統治権の保障にむけたオスマン政府の要望は、占領軍侵攻前にボスニア住民に対して発布されるひとつの宣誓文によって満たされるであろうと約束した。^⑤

ハプスブルク帝国は、ボスニアへの占領軍侵攻を開始する直前の一八七八年七月下旬、ボスニア全住民にむけてその宣誓文を発

表した。その宣誓文ではまず、ハプスブルク帝国の占領軍侵攻がベリン会議の決定と「スルタン陛下」の同意にもとづき、ボスニア住民に「静寂と安寧」をもたらす目的で実行されることが告げられた。そのうえで、「ボスニアのすべての人々」の「生活・信仰・財産の全てが保護されるだろう」と述べられた。^⑥

このようにハプスブルク帝国はオスマン政府の意図に反して、宣誓文の発布によりボスニア住民の生活や信仰の保護を明示することで、占領に関するオスマン帝国との個別の協定締結を回避しようとした。ハプスブルク側にとっては、協定締結が占領後のボスニアにおける統治者としての自らの主体性を確保しえないことにつながるという危惧もあったことであろう。

ハプスブルク帝国が宣誓文を発布した背景には、オスマン政府へのこうした対応とならび、占領軍侵攻に対するボスニア住民の混乱を最小限に抑えようとするねらいもあった。ボスニアの中心都市サラエヴォのイスラーム教徒内では、一部の富裕層や地主層に占領に対する肯定的な反応がみられたものの、その大部分はハプスブルク帝国の進出に反感を覚えていた。^⑦一八七八年七月上旬になると、イスラーム教徒の集団がサラエヴォの中心街に位置するガジ・フスレヴ・ベグ・モスクの中庭に集まって、占領に反対するデモ行動を開始した。^⑧

一八七八年七月末、ハプスブルク帝国の占領軍がボスニアの国境を越え侵攻すると、宣誓文の発布もむなしく、イスラーム教徒による占領軍への抵抗活動はより組織的になかたちで本格化した。

サラエヴォでは、一部の正教徒とイスラーム教徒の中・下流階層の商人や聖職者が結成していた「民衆集会」という組織を中心に抵抗活動が展開された。当時のハプスブルク帝国在ボスニア領事ヴァシッチの報告によれば、その指導者の一人でイスラーム教徒のヴィライエトヴィッチは、コーランからの引用を何度も繰り返し、その抵抗活動を鼓舞し続けていた。^⑨

「イスラーム主義」を掲げるスルタンにとって、占領に対するイスラーム教徒のこうした反応は、その保護にむけてハプスブルク帝国との外交的取引をおこなう正当な理由となるものとして考えられた。ここにオスマン帝国は、スルタンの統治権保持を約束する両国家間の協定締結なしに、ボスニア占領が実現化しえないことをハプスブルク側に意識させる機会を得たと言える。アブデユルハミト二世は、ボスニア住民の占領軍への抵抗活動が自らの「権威と人格」への帰属意識から生じたのだと在オスマン帝国大使ツイヒーに告げた。^⑩ スルタンからみれば、国家の統治者であることとならび全イスラーム共同体の頂点に立つカリフとしても、ボスニアを非イスラーム国家に割譲することは無条件には同意さ

れないものであった。従来の研究ではこうした事実を看過したからこそ、後述するイスラーム教徒の活動も民族意識の萌芽の一段階としてのみ論じられたと考えられる。

こうしたスルタンの主張に対してハプスブルク帝国は、占領軍侵攻による軍事的・経済的負担の増大とそれに伴う国内の政治的混乱も顧慮し、オスマン帝国との協定締結も現実的な選択として視野に入れた。ハプスブルク帝国は最終的に、ボスニアの完全な制圧にいたるまで当時の最大動員兵力の約三分の一を投入せねばならなかった。^⑪ ボスニア占領に際してのこのような多大なる損失は、ボスニア占領を推進していた共通外相アンドラーシに対する国内の政治家層による激しい非難を引き起こした。元々、帝国のオーストリア側ではドイツ系の政治家層を中心に、ボスニア占領に伴う帝国内のスラヴ系住民の増大を懸念して、その占領自体に対する批判的な意見が広がっていた。その結果、議会ではベルリン条約の正式な批准も一八七九年二月まで承認されることはなかった。^⑫ 国内のこうした状況も鑑みれば、ハプスブルク帝国にとってオスマン帝国との協定締結は、ボスニア占領により揺らぎうる国家としての一体性保持のためにも必要に迫られた措置であったのだ。

一八七八年八月二〇日、在オスマン帝国大使ツイヒーはアンド

ラーシへの書簡の中で、ボスニア領有問題の早期決着にむけて「スルタン個人とその統治者としての絶対的な意思は常に考慮すべき要因だ。スルトンの意思がすべての問題に決定を下す」と述べ、オスマン帝国との協定締結にむけた具体的な活動に着手した^⑬。その交渉過程でオスマン側は、ボスニアにおけるオスマン国旗の掲揚などスルトンの統治権継続を明示させる項目が協定に盛り込まれるべしと強調しつつ、ボスニアに住む全宗教集団の信仰の自由、とくにイスラーム教徒の保護を主張した。これに対してハプスブルク帝国は、占領に抗うイスラーム教徒の反発の鎮静化とその後の統治活動の円滑化にむけて、この要求に同意することを決定した。ただしその見返りとして、ボスニアの南部に位置し軍事戦略上重要な地域であるオスマン領ノヴィ・パザール県への軍隊の駐留をオスマン政府に認めさせた^⑭。

こうしてハプスブルク帝国とオスマン帝国は一八七九年四月、全一〇項目からなる協定の締結を正式に発表した^⑮。その前文ではまず、ハプスブルク帝国によるボスニアの占領が「当地域におけるスルタン皇帝陛下の統治権を侵害することはない」と明言された。そのうえで、とくに注目すべきは、ボスニアのイスラーム教徒の処遇を定めた第二項の内容である。すなわち「イスラーム教徒には、その宗教指導者との交流において完全な自由が保障され

る。（中略）イスラーム教徒の財産や信仰に対するいかなる攻撃も厳格に罰せられる」と。協定の前文とこの第二項を念頭におけば、オスマン帝国のスルタンが占領後のボスニアにおいても一定の統治権を保持することは明白である。それはとりわけ、イスラーム教徒について信仰・習慣の保護とともに「宗教指導者」との交流の自由も保障されたことから理解される。ハプスブルク帝国はこのような原則に従い、占領地ボスニアにおけるイスラーム統治を実践していかなばならないのであった。

以上から、ハプスブルク帝国が四月協定の締結により、「イスラーム主義」を掲げるオスマン帝国のスルタンに一定の譲歩を示しながら、ボスニア統治に着手せざるをえない状況が明らかとなった。だが、協定締結への当初の対応からもうかがえたとおり、ハプスブルク帝国はその締結がボスニアの統治者としての主体性の確保と相容れず、その後の統治活動の足かせになることを十分に認識していたと言える。だからこそ、次章で論じられるように、ハプスブルク帝国はボスニアにおいてより確固とした統治体制を構築するべく、イスラーム教徒のための独自の宗教職の創設にむけて動き出していくのであった。

① Gavranović, B. *Bosna i Hercegovina u doba austrojuganske okupacije 1878. god.* Sarajevo, 1973, str. 151. 本書は「ボスニア占領に關す

る未刊行史料を中心とした史料集である。

- ② Landau, J. M., *The Politics of Pan-Islam: Ideology and Organization*, Oxford, 1990, pp. 10-11. 鈴木董「イスラム国際体系」有賀他編『講座国際政治』一「東京大学出版会」一九八九年、一〇三—一〇六頁。

- ③ Gavranović, *op. cit.*, str. 209, 216.
④ *Ibid.*, str. 236.
⑤ *Ibid.*, str. 219.
⑥ *Das Vaterland*, 28. Juli 1878, S. 1.
⑦ Donia, R. J., *Sarajevo-A Biography*, Ann Arbor, 2006, p. 39.
⑧ *Ibid.*, pp. 44-45.
⑨ Gavranović, *op. cit.*, str. 169-174, 180-185, 273-275.
⑩ *Ibid.*, str. str. 263.
⑪ Donia, R. J. and Fine, J. V. A., *op. cit.*, p. 94.
⑫ Snyder, P. S., *Bosnia and Herzegovina in Cisleithanian Politics, 1878-1879*, Ann Arbor, 1974, p. 155, 179.
⑬ Gavranović, *op. cit.*, str. 303.
⑭ *Ibid.*, str. 298-299.
⑮ Imanović, M., *Pravni položaj i unutrašnja politički razinab BiH od 1878-1914*, Sarajevo, 1997, str. 17.
⑯ 協定の全文については Gavranović, *op. cit.*, str. 380-382.

二 レイス・ウル・ウレマー職の創設にむけて

イスラームの宗教職の創設を目指すハプスブルク帝国の動きは、四月協定の締結から約一カ月後より表面化した。一八七九年五月

一二日、帝国のボスニア統治機関たる共通大蔵省^①であった共通蔵相ホフマンは、オスマン帝国のシェイヒュル・イスラーム（オスマン帝国におけるイスラームの最高宗教職）の影響がイスラーム教徒に今後およびないように、ムフティー（イスラームの法学者）やカーデーイ（イスラーム法の適用を司る職務、主に裁判官）等に代表される宗教的な諸制度をいかにして保つべきか、と共通外相アンドラーシに問うた。そのうえで彼は、イスラーム教徒内にはその自治的な運営を望む集団がいるゆえ、彼らにその諸制度の運営を委ねるべきではないか、と付言した。

ボスニアのイスラーム教徒内にはオスマン支配末期より、中央政府の集権化に反発し、ハプスブルク帝国の占領に賛同する集団も存在していた。彼らはおもに大地主・商人・聖職者といった上流階層に属すイスラーム教徒で、占領後にはおもに統治体制を支える官吏層として活動した。一八七八年一月にその中の代表者五八名が当局に提出した請願書では、ハプスブルク皇帝への忠誠が誓われると同時に、実際にオスマン国家の権力から独立した宗教制度の確立が懇願されていた^③。

こうしたイスラーム教徒の要望にも応じたホフマンの提言に対して、アンドラーシはまずイスラーム教徒の宗教制度の自治化こそシェイヒュル・イスラームにボスニア統治への介入の機会を与

えうると警告した。なぜなら、ボスニアのイスラーム教徒が彼を宗教指導者として自発的に指名すれば、四月協定に従い当局側はそれを認めざるをえないからだと述べた。そのうえで、オスマン帝国側の影響力がイスラーム教徒に及ばないようにするためには、先述の請願書提出に署名したイスラーム教徒内から一名の宗教指導者を選ぶことが重要だとした。そして、その選出がイスラーム教徒自身の意思によるものと証明できれば、四月協定に反することもないと提言したのであった。^④

新たな宗教指導者を設置しようとするハプスブルク帝国側のような動きは、オスマン帝国のその後の外交活動に依拠してより明確な現実性を帯び始めた。一八八〇年六月、ハプスブルク帝国の在オスマン帝国大使デュブスキーは共通外省と共通蔵省にむけて、オスマン政府が四月協定に則してボスニアの宗教指導者としてシュクリという人物の派遣準備を進めていると伝えた。^⑤この措置によりオスマン帝国は四月協定にもとづいて、ボスニアにおけるスルタンの統治権を実際に行使しようとしていた。

これに対して、アンドラーシの後任者となった共通外相ハイメルレはまず、四月協定も顧慮すれば、ボスニアのイスラームに關わる聖職の任命権限がシェイヒユル・イスラームに属するのは当然であることを認めた。しかしそれでもなお彼は、このようなオ

スマン側の措置がハプスブルク帝国によるボスニア統治を前提としておこなわれるべきことを次のように述べ、オスマン政府はシュクリの派遣準備を延期すべしと主張した。すなわち、「（その聖職の）候補者は地元住民のみから選出されるべきで、さらに任命される人物についてはオーストリア・ハンガリーの当局に事前に知らされるべきだろう。（中略）当局はボスニアの全行政を引き継いだのだから、影響力のある地位から行政の秩序化に反する全要因を取り除く権限をもつのだ」と。^⑥

こうしたハイメルレの意見に従いデュブスキーは、オスマン政府にシュクリの派遣延期を申し入れた。他方でハイメルレに対しては、オスマン政府の措置に対抗するためには、ボスニアのイスラーム教徒のための新たな宗教職の創設を早期に実現すべきだと強調した。^⑦

これをうけて、一八八〇年にボスニア統治者となった共通蔵相スズラヴィも、ボスニア現地の統治当局に宗教職の創設準備に関する指示を出した。そこでは、前年に請願書を提出したイスラーム教徒との協力関係こそがシェイヒユル・イスラームの影響力の及ばない新たな宗教制度の組織化につながるだろう、とまず提言した。ただしそれでもその頂点に立つ指導者については、その教養・品行方正さ・社会的地位において名声に富み、同じ信者に多

大なる影響力を及ぼせる人物であるべきだと忠告したのだった。^⑧

ハプスブルク帝国官僚のこうした一連の対応からは、四月協定に矛盾しないかたちで、新たな宗教職の設置を実現したいという慎重な姿勢がうかがえる。その背景には、このような措置がオスマン帝国やボスニアのイスラーム教徒とのあいだに不必要な軋轢を生み、外交問題に発展すれば、ボスニア領有自体がセルビアやロシアも巻き込む国際的な問題へと再燃するという懸念もあったことであろう。だからこそスズラヴィは、外交筋を通じてカフカースにおけるロシアのイスラーム統治の現状や、北アフリカにおけるフランスの植民地支配に関する情報を収集し、オスマン国家から自立した宗教制度の在り方を調査・確認したのであった。^⑨

こうした事態の展開のなかで、ボスニアにおけるイスラームの宗教職を実際に創設したのは、一八八二年に共通蔵相に就任したカーライであった。彼による宗教職の設置にいたった直接の契機は、オスマン帝国がボスニアのイスラーム教徒に対する宗教的な指導・監督にむけて再び始動したことにあった。その際、オスマン政府は、先のハプスブルク側の指示も鑑み、地元のイスラーム教徒のなかから宗教指導者を選出し、その任務を直接委ねようとした。一八八二年二月九日、シェイヒュル・イスラームは、占領以前からサラエヴォのムフティーを担当していたオメロヴィッチ

に、ボスニアにおける宗教的業務全般についての指導権を委譲する旨の書簡を直接送付した。ところがオメロヴィッチは長らく地元の宗教家として活躍しながらも、ハプスブルク帝国の占領に対しては賛同を示し、先述の請願書の署名者にも名を連ねていた。そのため、彼はシェイヒュル・イスラームから受け取った書簡についてハプスブルク帝国の当局に報告したのであった。^⑩

カーライはこの事態を利用して、イスラームの宗教職の創設に着手した。彼はまず、「スルタンはカリフであるゆえ、トルコ支配下のイスラーム教徒、さらに、もはやその支配下ではない地域のイスラーム教徒にとっても国家元首のみならず宗教指導者でも」あるからこそ、ボスニアのイスラーム教徒に対するスルタンの影響力を絶つことが重要だと主張した。ただしそれでも、新たな宗教職の設置が四月協定に抵触してはならない。そう考えたカーライは、シェイヒュル・イスラームから指名されたオメロヴィッチ自身を、ハプスブルク皇帝がボスニアの新たなイスラーム宗教指導者レイス・ウル・ウレマーとして任命することを提案した。この措置であれば、ボスニアのイスラーム教徒の意向にも沿うことになり、四月協定にも抵触することなく、オスマン政府側からの抗議も回避できるだろうと考えられたのであった。^⑪

カーライは最終的に一八八二年一〇月、レイス・ウル・ウレ

マー職とその諮問機関で四名の委員からなるウレマー・メジュリス (Ulema-medžlis 「ウレマーの会合」) の設置を決定し、先述のオメロヴィッチを最初のレイス・ウル・ウレマーに就任させた^⑫。これに対してオスマン帝国は、自らの認めた宗教指導者が任命されたため、明確な抗議姿勢を示すことはなかった。

ハプスブルク帝国により創設されたボスニア独自のこの宗教職が、帝国の統治体制の一部としての役割を担っていたことは、その業務からも明らかである。レイス・ウル・ウレマー職とウレマー・メジュリスの委員の任命権は、ハプスブルク皇帝が掌握していた。ボスニアの地方当局からは、レイス・ウル・ウレマー職とウレマー・メジュリスの委員それぞれに給与が支給された。彼らの任務は基本的に、ボスニア各地のイスラーム全般に関わる宗教業務を管轄することにあつた。とくに主要な任務は、ボスニア各県のムフティーやカーディーの選出、帝国により組織化されたワクフ委員会のメンバーの適任者選出などであつた。^⑬ そのうえでレイス・ウル・ウレマーは、ハプスブルク帝国の統治体制にかなうようにイスラーム教徒を指導・管轄せねばならなかつた。

以上、ハプスブルク帝国がボスニア独自のイスラームの宗教職を創設する過程を考察してきた。こうした措置はハプスブルク帝国にとって、「イスラーム主義」を掲げたスルタンの影響力から

イスラーム教徒を引き離し、四月協定の規定を骨抜きにしながら、彼らに対する支配を正当化しようとするものであつた。

それではこの宗教職の設置は、イスラーム教徒自身にとつてどのように捉えられたのか。現時点では史料の制約上、イスラーム教徒側の反応を詳細に論じることが困難だが、本章では可能な限りこの点について検討してみたい。

① ボスニアは、帝国内の民族間の均衡をはかる理由から、オーストリアにもハンガリーにも帰属せず、共通大蔵省の管轄下におかれた。Imanović, *op. cit.*, str. 21-36.

② Haus-Hof- und Staatsarchiv, Politische Archiv XL Interna (カールスホルツ), HHSa, PA) 210.1633/B.H. Wien, am 12. Mai 1879.

③ Kemura, I., "O jednoj značajnoj predstavi iz 1878. godine", *Glasnik Vrhovnog islamskog starješinstva u SFRJ*, 11-12/33, 1970, str. 559-564.

④ HHSa, PA 210. Wien, am 21. Mai 1879.

⑤ HHSa, PA 210. Nr. 46.

⑥ HHSa, PA 210. Wien, am 14. Juni 1880.

⑦ HHSa, PA 210. Nr. 50.

⑧ HHSa, PA 210. 5588/B.H.

⑨ Durmišević, *op. cit.*, str. 110.

⑩ HHSa, PA 210. 2839/B.H.

⑪ HHSa, PA 210. 23/res.

⑫ Ibid.

⑬ ハプスブルク帝国は一八九四年七月、イスラームの寄進制度ワクフ

の指導・管理機関となるワクフ委員会を創設した。Dumišević, op. cit., str. 118-119, 121-133.

三 宗教的紐帯による対抗

本章では、ボスニアのイスラーム教徒がオスマン帝国との関係にもとづき、ハプスブルク帝国によるレイス・ウル・ウレマー職の設置にいかなる反応を示したのか、という問題について検討する。これにより彼らが、民族主義的な活動とは異なるかたちで帝国統治に対抗した様相を明らかにしよう。

ボスニアのイスラーム教徒にとってレイス・ウル・ウレマーとの関係は、オスマン帝国の存在を前提とする自らの宗教的な帰属意識を問う重要な問題であった。それは、一八九三年のレイス・ウル・ウレマー職の交代を契機として表面化した。

ボスニア統治者たる共通蔵相カーライはオメロヴィッチが病により辞職したことをうけて、一八九三年一〇月二五日、皇帝の同意のもと、新たなレイス・ウル・ウレマーに官吏であったアザバギッチを任命した。^① 彼が任命されたのは、ボスニアからオスマン帝国へのイスラーム教徒の移住活動の高まりに宗教指導者としての確に対応しうる人物だと考えられたからであった。

当時アブデュルハミト二世は、「イスラーム主義」にもとづい

てより強固なオスマン国家の再興を目指すべく、帝国の旧支配地域からイスラーム教徒が帝国領内へ移住することを奨励していた。実際、ハプスブルク帝国がボスニア独自の宗教制度の確立によりオスマン国家からイスラーム教徒を引き離そうとすると、ボスニアからのイスラーム教徒の移住も積極的に勧めるようになった。一九〇六年のボスニア統治当局の報告書によれば、一八八三年から一九〇五年までにボスニアからオスマン帝国領内へ移住したイスラーム教徒の数は、計二万九〇七九名に達した。^②

ボスニア統治者たるカーライにとって、イスラーム教徒移住者数のこうした増加は、ボスニアでのセルビア人やクロアチア人の数的優位を作り出し、その両者の民族主義的な影響力の拡大を引き起こす可能性があった。そこで彼は、従来からイスラーム教徒の移住活動に対して異議を唱えていたアザバギッチを、シェイヒユル・イスラームの認可をとりつけることもなく、レイス・ウル・ウレマーとして任命したのである。アザバギッチは、一八八六年に『ビジュラについての伝言』というオスマン語の論稿を発表し、移住活動に対する批判的な態度を表明していた。^③ このような彼の任命の経緯からは、レイス・ウル・ウレマーに期待された役割が、帝国統治下のボスニアにおいてイスラーム教徒の一体性を保持することにあつたと考えられる。

こうしてアザバギッチは、前任者と異なりシェイヒュル・イスラームの認可を受けないまま、一九〇九年までその地位にあり続けた。この措置に対してオスマン政府は一八九五年一月より、スルタンの統治権とイスラーム教徒の権利の保障を定めた四月協定も踏まえて、アザバギッチがシェイヒュル・イスラームから認可を受けていないとハプスブルク側に外交筋を介して警告した^⑤。それでもカーライは、四月協定の第二項に反していない理由として、ボスニアのこの宗教職が住民からある程度受け入れられてきたからこそ、一八八二年以来存続してきたのだと反論し、オスマン政府の要求に従うことはなかった^⑥。

しかし、ボスニアのイスラーム教徒からみれば、移住を通じたオスマン国家への帰属に否定的な態度を示したうえ、さらにシェイヒュル・イスラームの認可も正式に受けていない宗教指導者に従属することは容易に受け入れがたいことであつた。そこで彼らは、四月協定に依拠し、「イスラーム主義」を掲げるスルタンの権威への帰属の正当性を訴えながら、ハプスブルク帝国統治に對抗しようとする嘆願活動を展開した。

この活動を率いたのは、当時ヘルツェゴヴィナ地方の中心都市モスタルのムフティーに就任していたジャビッチであつた。一八五八年生まれの彼は、近代的な統治体制とイスラーム精神が矛盾

するという信念の持ち主で、コーランの教えに従うことに厳格な人物として名声を集めていた。そのため親オスマン帝国の傾向も示したことから、当時のスルタンたるアブデュルハミト二世の「イスラーム主義」にも通じていたと考えられる^⑦。

ジャビッチが自らの信念を実際の行動に結びつけ、本格的に活動を始めたのは、一八九九年からであつた。同年五月モスタル近郊の村で、ファタというイスラーム教徒の少女がカトリックに改宗するという事件が生じた。そこでジャビッチを中心とするモスタルのイスラーム教徒は、この事件そのものに対する嘆願書に加え、帝国のイスラーム統治全般に関する要望を示した別の嘆願書の提出にむけても準備を進めた。そして同年八月には、支持者獲得のためにモスタル県全土に向けて代表者を送り、その翌月には提出されるべき嘆願書の草稿を完成させた^⑧。

実際に提出されたカーライへの嘆願書において主張の焦点となつたのは、モスタル県内のイスラーム教徒による独自の委員会創設の提案であつた。その役割は、当局の代わりにモスタル県内のイスラーム統治全般に関して管轄することと規定された^⑨。この彼らの主張からは、レイス・ウル・ウレマーに従属することなく宗教的な制度を自主的に運営したいという意志がうかがえるが、それでもそれは、モスタルのイスラーム教徒の局地的な要望を表明

したものにはすぎなかった。

こうした行動に対してボスニアの統治当局は、一九〇〇年二月、帝国によるイスラーム統治の正当性を強調しながら、モスタルのイスラーム教徒に彼らの嘆願書が棄却されたと伝えた。さらに同年四月には、嘆願活動の主導者であるジャビッチをムフティー職から解雇したのだった。^⑩

しかしこれら一連の対抗措置も、モスタルからボスニア各地へと広がりをはじめていた嘆願活動を止めることは困難であった。ジャビッチを中心とするモスタルのイスラーム教徒は、ボスニアの各都市において支持者獲得にむけた行動を活発化させた。その結果、一九〇〇年以前には嘆願活動への署名者数が数百名だったのが、それ以後には数千名にまで増加した。さらに彼らは、一九〇〇年五月から九月にかけてボスニア内外において、新たな嘆願書作成にむけた会合を開催した。各会合には指導者たるジャビッチも含めてボスニア全六県からそれぞれ代表者が参加し、ボスニア各地のイスラーム教徒の要望にかなう嘆願書の作成に着手した。^⑪

それでは、レイス・ウル・ウレマーであるアザバギッチは、この嘆願活動の広がりいかなる対応を示したのか。一九〇〇年五月、アザバギッチとウレマー・メジュリスの二人、さらにイスラーム教徒の官吏層は共同で、ジャビッチを指導者とする嘆願活

動に反対することを発表した。そこでは、ハプスブルク帝国がイスラーム教徒の統治に献身的な努力を進めていることと同時に、嘆願活動を牽引するイスラーム教徒がボスニア全住民の代表者ではないことが主張された。アザバギッチのこうした行動は、嘆願活動の拡大を抑えようとするハプスブルク帝国の統治方針に支えられたものであったと考えられる。

さらにアザバギッチと官吏層と並び、嘆願活動の広がり批判的な姿勢を示したのはムスリム知識人層であった。別稿で論じたように、近代的な学校教育も受けた彼らは、ボスニア生まれのムスリムとしての民族的な帰属意識をイスラーム教徒内に広めるうえで、ジャビッチを指導者とする嘆願活動がその妨げになると考えていた。そこで一九〇三年には文芸誌『ベハール（花）』を創刊し、嘆願活動に対抗して自らの意見を広めようとした。こうした事実も念頭におくと、当時のボスニアのイスラーム社会では、ハプスブルク帝国の統治体制を支えるイスラーム教徒の集団が存在したと同時に、ジャビッチを指導者とする嘆願活動の広がりには一定の限界があったことも認めなければならない。

それでも一九〇〇年二月にはついに、ボスニア全土のイスラーム教徒の意見をまとめたと言われる嘆願書が、ボスニア各県の代表者全一名によって共通蔵相カライへと提出された。^⑫この

嘆願書は、各県のイスラーム教徒代表者が一丸となり、ハプスブルク帝国の統治体制のなかでスルタンの庇護のもと自治的な宗教制度の導入を明確に主張したという点で特筆に値する。

この嘆願書ではまず、ボスニアのイスラーム教徒の現況が四月協定の内容に反するものと訴えられた。そのうえで「イスラームの危機」という言葉が何度も繰り返され、従来の嘆願書に則して占領以後の帝国統治の在り方を回顧し、カトリック教徒による改宗活動、学校教育やワクフ制度の現状に対する不満が論じられた。そして、その根源的原因がレイス・ウル・ウレマーを頂点とする帝国主導の宗教制度にあると明言された。そもそもイスラームの理念においては国家と宗教が不可分の関係にあるゆえ、非イスラームの統治体制に従属することはできない。たとえば現実においても、ロシア、ルーマニア、ブルガリア、キプロスでは統治者側がボスニアのようにイスラーム統治に介入することはない。それゆえ、ハプスブルク帝国も現行の制度にかえて、より自治的なイスラームの宗教制度を導入することが必要であると訴えられた。具体的には、イスラーム教徒の代表者からなるひとつの集会を創設し、それを母体としてレイス・ウル・ウレマーの選出やワクフの運営をおこなうものであった。その際レイス・ウル・ウレマーは、シェイヒュル・イスラームの認可を受けたうえ

で活動すべしと強調されたのだった。^⑮

ここからは、イスラーム教徒によるこの嘆願活動が、宗教的紐帯を介したスルタンの権威への帰属を希求し、ボスニアの統治体制内における自治の獲得を目指すものであったということが把握される。それは先述のように、占領に賛同を示した一部のイスラーム教徒が、オスマン国家から独立した宗教制度を求めた姿勢とは相容れないものであったと言える。ジャビッチに率いられたイスラーム教徒にとって、四月協定の内容は遵守されるべきものであり、そのためにはレイス・ウル・ウレマーを頂点とする宗教制度も、「イスラーム主義」を掲げるスルタンの権威の庇護のもと自治的な制度により運営されねばならないと考えられたのであった。

しかし、共通蔵相カーライはこうした活動に対して、帝国の宗教政策が四月協定に反することはないと明言した。そのうえで、イスラーム教徒への譲歩が「国家のなかに国家を生み出しうる政治的な要因」になりうるゆえ、「（ハプスブルク）皇帝の統治権や国家主権が絶対に保持されなければならない」と主張し、最終的にこの一二月の嘆願書も棄却した。^⑯さらにこの活動がこれ以上拡大することを抑えるべく、その指導者層への対抗措置も実施し、一九〇二年一月にはジャビッチをはじめとする数名のイスラーム

教徒がコンスタンティノープルを訪問した際、ボスニアへの帰国を禁じたのであった。^⑭ カーライによるこうした措置の背景には、セルビア人やクロアチア人の民族主義的な活動が高まっていたからで、ハプスブルク帝国がボスニアを継続して領有するためには、スルタンとイスラーム教徒との関係も絶たねばならないという意図もあつたことであろう。

モスタルからボスニア各地へ広がった嘆願活動は、ジャビッチが不在となった結果、一九〇一年から一九〇五年にかけて一時的に停滞した。それでもその活動は最終的に一九〇六年一月、イスラーム教徒初の政治組織「ムスリム大衆組織 (Muslimanska narodna organizacija、以下MNO)」の創立に結実した。

この組織が嘆願活動の流れを汲んでいたことは、創立時にイスラーム教徒一〇〇名の署名とともに作成された活動理念に関する覚書からも明らかである。そこではまず、ボスニアのイスラーム教徒は「悲しむべき現状」にあると指摘される。その理由は、四月協定の内容に反したハプスブルク側の行動が改められることなく、新たな宗教職の設置により「長老府 (シェイヒュル・イスラームを長官とする宗教行政の最高官庁——引用者補足) との精神的・宗教的つながりが完全に分断されているから」であつた。さらに、自治的な宗教制度の導入も当局の政治目的にかなわな

いゆえ実現しないと述べられた。そしてシェイヒュル・イスラームの認可をうけたレイス・ウル・ウレマーにしか従えないことを強調するべく、次のように主張したのであった。すなわち、「われわれの宗教的原理に従えば、コンスタンティノープルにいる今日のカリフこそわれわれの最高宗教指導者であり、われわれがその人物との宗教的紐帯を絶つことは不可能であるし、それにより不信心者あるいは離反者となることもいとめられない」と。^⑮

以上の議論から、ボスニアのイスラーム教徒がハプスブルク帝国による宗教指導職の設置に対していかなる反応を示したのか、という問題が明らかとなった。ジャビッチを中心とする嘆願活動に与したイスラーム教徒は、レイス・ウル・ウレマーを頂点とする宗教制度が、ハプスブルク帝国の統治体制の一部としてではなく、カリフたるスルタンの指導のもとで自治的に運営されねばならないと考えていた。それは、四月の協定内容に依拠して、「イスラーム主義」を掲げたスルタンの権威への帰属の正当性を訴え、ハプスブルク帝国統治のなかにとどまりながらも、それを形ばかりのものにしようとする試みであつた。この活動がボスニアのイスラーム社会において一定の影響力をもちえたことは、最終的にMNOという政治組織の誕生に結実したことからもうかがえる。

たしかにこの嘆願活動には、レイス・ウル・ウレマーやその他

の官吏層、あるいはムスリム知識人層の存在からも理解されたとおり、ハブスブルク帝国統治の現状において一定の限界があったことも否めない。しかしその活動の展開過程からは、ハブスブルク帝国がボスニアの領有にむけてイスラーム共同体を統括しようとする状況のなかで、スルタンの権威を後ろ盾として、帝国統治に対抗しようとするボスニアのイスラーム教徒の姿が浮き彫りになったと言えそうだ。

- ① Durmišević, *op. cit.*, str. 127.
- ② Karpat, *op. cit.*, pp. 184-188.
- ③ *Bericht über die Verwaltung von Bosnien und der Herzegovina 1906* von K. und K. Gemeinsames Finanzministerium, Wien, S. 16.
- ④ Karčić, F. i Jahić, M. "Jedna važna fetava o pitanju iseljavanja bosanskih muslimana u vrijeme austrougarske uprave". *Prilozi*, 27, Sarajevo, 1991, str. 43.
- ⑤ HHSStA, PA 213, Wien, am 15. Jänner 1895.
- ⑥ HHSStA, PA 213, Wien, am 18. März 1895.
- ⑦ Donia, *Islam*, p. 99; Fazlî, F. *Hafizi u Bosni i Hercegovini u posljednjih 150 godina*, Sarajevo, 2006, str. 172-173.
- ⑧ Donia, *Islam*, pp. 113-120.
- ⑨ Скарпін, В. (ед.), *Босна и Херцеговина под аустро-угарском управом*, Београд, 1938, str. 65.
- ⑩ Šehić, *op. cit.*, str. 60-61.
- ⑪ Donia, *Islam*, pp. 133-137, 149.
- ⑫ *Ibid.*, p. 147.

- ⑬ 拙稿「ボスニア系ムスリム知識人による『民族』論——ハブスブルク帝国統治期を中心に——」『西洋史學』二三三号、二〇〇九年、四五一-四七頁（以下、拙稿「ムスリム知識人」）。
- ⑭ Šehić, *op. cit.*, str. 71.
- ⑮ への嘆願書は *Systi islamskoga naroda Bosne i Hercegovine nastari vjersko-prosvjetnog uređenja i samouprava* というかたちで刊行されているが、ボスニア現地での調査においてもその所蔵は確認されなかった。そこで本稿では、この史料を引用した以下の諸研究よりその内容を把握するに努めた。Babuna, A. *Die nationale Entwicklung der bosnischen Muslime*, Frankfurt am Main, 1996, S. 119-126.

- ⑯ Скарпін, *op. cit.*, str. 70-74; Šehić, *op. cit.*, str. 73-75.
- ⑰ Hauptmann, F. *Borba Muslimana Bosne i Hercegovine za vjersku vukusko-meatjsku autonomiju*, Sarajevo, 1967, str. 122, 133-135.
- ⑱ Babuna, *op. cit.*, S. 139-140.
- ⑲ への組織についてはいずれも「ムスリム民族組織」という名称を用いた（拙稿「ムスリム知識人」五〇頁）。しかし、嘆願活動の流れを汲むへの組織の性格を考慮すれば、「narodna」は「大衆」と訳するほうが適切であると思われる。
- ⑳ *Memoratum Bosansko Hercegovackog Muslimanskog Naroda*, Zagreb, 1906.
- ㉑ *Ibid.*, str. 6, 9.

おわりに

最後に本稿の議論を整理し、今後の課題について述べておこう。ハブスブルク帝国によるボスニア領有は、一八七九年の四月協

定の締結により、スルタンの統治権の継続的な有効性とイスラーム教徒の保護といった一定の条件のもとでおこなわれた。その背景には、当時のスルタンたるアブデュルハミト二世が「イスラーム主義」という理念のもと、ボスニアのイスラーム教徒も自らの権限の範囲内におくことで、帝国の一体性を保持しようとする政治的意図があった。これに対してハプスブルク帝国は、国内の内政的混乱にも対応するべく、オスマン帝国に譲歩しながらボスニア領有を実現するという選択をとらざるをえなかった。

しかしハプスブルク帝国は、オスマン帝国が宗教指導者の派遣というかたちで、四月協定で認められた権限を実際に行使しようとしたことをうけて、ボスニアでのより確固とした統治体制の確立にむけた宗教政策を実行した。そこで、オスマン国家からイスラーム教徒を引き離す措置として、反オスマン志向のイスラーム教徒の支持を取りつながら、レイス・ウル・ウレマーを頂点とするボスニア独自の宗教制度を創設したのであった。ただしその際も、四月協定の内容を全く反故とすることなく、スルタンの権限が直接侵害されないよう対応した。それはハプスブルク帝国が当初、シェイヒュル・イスラームにより宗教指導者として指名されたオメロヴィッチを最初のレイス・ウル・ウレマーに任命した事実からも明らかである。

だがハプスブルク帝国は一八九三年一〇月、シェイヒュル・イスラームの認可を取り付けることもなく、次のレイス・ウル・ウレマーとしてアザバギッチを任命した。それは、帝国がボスニアを継続して領有するうえで、アブデュルハミト二世の「イスラーム主義」に呼応したボスニアのイスラーム教徒の移住活動を抑えるための方策であった。ハプスブルク帝国によるボスニア領有には、民族主義的な影響力の拡大を目指すセルビア人やクロアチア人がボスニア住民の多数派とならないよう、イスラーム教徒の存在が必要不可欠であったのである。そこで、もともと移住活動に反対を表明していたアザバギッチには、レイス・ウル・ウレマーとして活動することで、ボスニアにおけるイスラーム教徒の一体性を保持することが期待されたのだった。こうして彼は、前任者と異なりシェイヒュル・イスラームの認可も受けず、一九〇九年までその宗教指導職に在位することとなった。

これに対してジャビッチを中心とするイスラーム教徒は、スルタンとの宗教的紐帯のもとに、ハプスブルク帝国のこうした宗教政策に抗する嘆願活動を展開した。彼らにとっては、ハプスブルク帝国統治を支えるべく、シェイヒュル・イスラームの認可もないままレイス・ウル・ウレマーに就任したアザバギッチに従属することは認めがたいことだと考えられた。そこで彼らは嘆願活動

の過程において、非イスラーム統治下のものでイスラームとして生きていくためには、四月協定も拠り所としながら、オスマン国家により正式に認可された宗教指導者のもとで自治的な宗教制度が運営されねばならないことを主張したのであった。

嘆願活動は実際のところ、ムスリム知識人層の反発を惹起するなどボスニアの全イスラーム教徒の意見を集約したものとはならなかった。だがこの活動からは、「イスラーム主義」を掲げるスルタンの庇護のもとボスニアにおけるイスラームとしての自治を保持することで、ハプスブルク帝国統治に対抗しようとする、イスラーム教徒独自の姿勢が示されていたことは間違いないだろう。

以上から、ハプスブルク帝国統治とボスニアのイスラーム教徒の関係が、従来の研究において示されたような、帝国対民族といった図式では捉えきれないことが明白となった。ハプスブルク帝国にとつては、国内の民族間の均衡をはかりつつ、ボスニアを領有し続けていくためには、オスマン帝国の影響力を排したイスラーム共同体の支えこそ必要だと考えられた。他方イスラーム教徒は、民族主義を掲げたボスニアの他民族とは異なり、スルタン

との宗教的な紐帯によって帝国統治に抗しそれを乗り越えようとしたのであった。この両者の対抗関係こそ、本稿で示されたとおり、ハプスブルク帝国が、他の西洋諸国と並び、「イスラーム主義」を掲げるオスマン帝国にも対峙しながらボスニア統治を実践した局面から見通されるものであろう。こうした本稿の事例は今後、同時期にオスマン帝国領へと進出していた西欧諸国やロシア帝国によるイスラーム統治の在り方との比較の素材としても有益なものとなると考えられる。

本稿のように、オスマン帝国の動向も視野に入れ、ハプスブルク帝国とボスニアのイスラーム教徒の関係をさらに考察していく際には、一九〇八年七月に勃発した青年トルコ革命がこの両者の関係にいかなる影響を及ぼしたのかという問題についても検討すべきである。この問題の考察については今後の課題としたい。

（付記） 本稿は、平成二一年度文部科学省科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。

（日本学術振興会特別研究員）

Before the middle of the 13th century, the basic meaning of the word *akutō* was exclusively “a group of villains,” which had been the original meaning of the word. However, after *akutō* was adopted and defined as a legal term by the Kamakura shogunate to refer to “crimes such as *yo-uchi* 夜討 (burglary), *gōtō* 強盜 (robbery), *sanzoku* 山賊 (brigandage), or *kaizoku* 海賊 (piracy), and also the gangs who committed those crimes” (which occurred during the middle of the 13th century, specifically from the second month of Ennō 2 (1240) to the fifth month of Kōchō 2 (1262)), this new usage gradually spread beyond official usage and took root. The word *akutō* then came to be recognized as a word closely associated with robbery, and “robbery and robbers” was established as one of the new basic meanings of this word. Thus, the word *akutō* became popularly a polysemic term in the era from the middle of the Kamakura period to Muromachi period.

One result of this study is to enable us to understand the adoption and definition of *akutō* as being closely related to the strengthening of the police-action system by the Kamakura shogunate in the middle of the 13th century. It can be surmised that the Kamakura shogunate adopted and defined the word *akutō* as it gradually reinforced countermeasures against robbers as a part of policy of good governance instituted after the famine of the Kangi era in the first half of the 13th century and increasingly took measures to suppress those it branded *akutō*.

Religious Politics of the Habsburg Monarchy and
Reactions from the Islamic People of Bosnia:
Focusing on the Establishment of the Reis-ul-Ulema

by

YONEOKA Daisuke

This paper examines religious policies of the Habsburg monarchy and reactions of the Bosnian Islamic people to them. Conventional historiographies have generally regarded the responses of the Islamic people as identical with those of the nationalist movements that spread throughout the Balkans at that

time. However, this view should be revised on the basis of a reconsideration of the real purpose of the religious policies practiced by the monarchy in Bosnia, and the relationship between the Bosnian Islamic people and the political system of the Ottoman Empire.

The Sultan Abdul Hamid II aimed to maintain the political unity of the Ottoman Empire based on Pan-Islamism. He claimed his own sovereignty over the Islamic people within and outside the Empire's territories. Therefore, the Porte could not easily recognize the occupation of Bosnia, although it was granted to the Habsburg monarchy on the conclusion of Berlin treaty in July 1878.

The occupation of Bosnia was a vital mission for the Habsburg monarchy in order to prevent the expansion of South Slavism that might provoke greater crises in the Habsburg state system. The monarchy decided to sign the convention of April 1879 with the Ottoman Empire in order to smoothly establish its rule in Bosnia. It obligated the Habsburg regime in Bosnia to respect the sovereignty of the Sultan and protect the Islamic people.

However, the Habsburg monarchy instituted religious policies to seize the initiative in its rule over Bosnia when the Porte planned to dispatch an Islamic person as the religious supervisor to Bosnia according to the convention. The most important policy was the foundation of the new Islamic institution in Bosnia. After gaining the support of the local Islamic people such as officials and intellectuals, the Habsburg regime established the Reis-ul-Ulema, a religious leader, on October 1882 and invested him with the authority to control all matters concerned with local Islamic society. Nevertheless, this act did not violate the convention, because the regime appointed Omerović who had been approved as a religious leader of Bosnia by the Sheikh ul-Islam to be the first Reis-ul-Ulema.

Given this situation it was very important for the Habsburg monarchy to prevent the intervention by the Porte in the rule of Bosnia. Abdul Hamid II encouraged the emigration movement of the Bosnian Islamic people to the Ottoman Empire. The Habsburg regime believed that Bosnia would be exposed to Serbian or Croatian nationalism and integrated into Serbia or Croatia if the local Islamic population were gradually reduced. On October 1893 the regime appointed Azapagić to be the Reis-ul-Ulema, replacing Omerović. This measure was intended to severe the relationship between the Bosnian Islamic people and the Sultan. Azapagić originally opposed the emigration movement and desired to maintain the unity of the Islamic people in Bosnia. He served as the Reis-ul-Ulema without receiving the approval from the Sheikh ul-Islam until he

resigned from the post in 1909.

This policy, however, provoked opposition among the Bosnian Islamic people. They believed that the Islamic people should not obey Reis-ul-Ulema Azapagić, because he had not been formally approved by the Sheikh ul-Islam. After 1899, an opposition group led by Džabić organized a movement to petition the Habsburg regime. It claimed that the regime should protect the religious relationship between the Islamic people and the Sultan in accord with the convention of April 1879, and thus establish an autonomous religious institution under the leadership of the Reis-ul-Ulema, who would have received the approval of the Sheikh ul-Islam beforehand. This group finally formed the first Bosnian Islamic party Muslimanska Narodna Organizacija in December of 1906.

Two conclusions can be derived from this study. First, the Habsburg monarchy would need to maintain the possession of Bosnia in face of the policies of Abdul Hamid II that were based on Pan-Islamism. The monarchy thus founded a new religious institution under the leadership of the Reis-ul-Ulema in order to invalidate the sovereignty of the Sultan. Second, we can understand from the petition movement that the Bosnian Islamic people tried to oppose the Habsburg rule by demanding religious autonomy under the protection of the Sultan. This movement was, however, unable to attract supports of all local Islamic people. For instance, the Muslim intellectuals criticized the fact that this movement impeded the modernization of Islamic society. This opposition movement was, indeed, a unique reaction of the Islamic people that differed from the nationalist movements of other groups such as the Serbs and Croats.